鳥取の民話 50

収録・解説　酒井董美（ただよし）

語り手　山口忠光さん（明治40年生まれ）
昭和63年8月24日収録

和尚さんが嫁姑を仲裁

ヒガンとヒイガン

（東伯郡三朝町大谷）

イラスト・福本隆男

あらすじ

昔あるところに姑（しゅうとめ）さんと嫁さんと仲が悪うて、こりゃ日本どこへ行ってもあることだけど、いろいろ話が衝突しよったら、そのうちになあ、春先の彼岸が来るようになって「はあ、もうすぐヒガンだ」って姑さんが言いなったら「ありゃあ、お母さん、ヒガンではない、ヒイガンだ」言うて。

「ヒガンだ」「ヒイガンだ」って。「そがなことなら、お母さん、お寺へ行って和尚さんに聞いてみようだないかいな」って。「おう、それ、それ、それに頼まにゃいけんとりなはるだけえ、和尚さんに聞いて、そっで和尚さんは、こがあにって言いなはったらなあ、どっちの分も文句を言わんぶんにしよう」って。

で、そういう話につけといて、そいからまあ、嫁さんは野良仕事に出んならんけえ、出とる。

その後へ母さんの方がお寺へ行った。

木綿を一反と米を一升持って、お寺へ参って「じつは和尚さん、こういうわけですが」「うーん。ようあることだけえなあ、うん、よしよし、分かった、分かった。ええ仲裁したるわいや」てって、姑さんはもどるし、そいから何日かおいて、嫁さんが行って、そいから「和尚さん、こういうわけだ」。

「うーん、こないだお母さんが来て言うとったわい。よしよし、分かった、分かった、ええあんばいに仲裁するわいや」ちって。そいから「まあ、おまえらちなあ、姑さんといっしょに話う決めて、いっしょに来にゃあ一人ずつじゃあいけんけえなあ、いっしょに来いよ」。それで嫁さん、帰って。

それから、今度、もう日にちを決めてお寺へ参って「じつは和尚さん、こういうわけですじゃが」。

「うんうん、分かった、分かった。このものはなあ、所ぃよっていろいろあるけど、まあお寺の方から言うとなあ、これはお寺の仕事だけえ、これはお寺の方から言うとなあ、このことは一週間あって、前の三日が『ヒガン』、後の三日が『ヒイガン』、その間に一日『中日』いうもんがある。その中日にゃ、木綿が二反と米が二升持って参るやになっとるだけえなあ、みんなその都合に考えとれよ」って和尚さんが仲裁したって。

昔こっぽり。

解説

語りの長さの関係で「あらすじ」としたが、実際は語られたままである。

関敬吾『日本昔話大成』の話型では笑話の「愚か嫁」の「姑の毒殺」に該当し、次のように出ている。

嫁が姑を憎んで、姑を殺すために毒薬をもらいに行く。死ぬまで大切にのませよといって医者は薬を与える。姑が親切にするので嫁は死なない薬をもらってくる。

各地で語られる話である。

（元鳥取短期大学教授）

（水曜日に掲載）

鳥取県立博物館HP「鳥取の民話」コーナーで語り手の音声が聴けます。